

Sprague, Joey, 2016, "Qualitative Shifts: Feminist Strategies in Field Research and Interviewing," *Feminist Methodologies for Critical Researchers: Bridging Differences Second Edition*, Rowman & Littlefield Publishers, 145-193.

ジョーイ・スプラグ, 2016, 「定性的研究に関する変化——フィールド調査とインタビューにおけるフェミニスト的戦略」

※ () の数字はページ数を、[]内は原文を表す。

レジュメ作成者による紹介文

本稿の著者である Joey Sprague (カンザス大学教授) は、フェミニスト方法論における著名な研究者の 1 人である。本稿は、フェミニスト方法論の入門書として名高い *Feminist Methodologies for Critical Researchers: Bridging Differences* の第 2 版に収録されている。本稿では、従来の定性的方法論に対するフェミニストによる批判が紹介されたのち、定性的方法論の問題点に対処するためにフェミニストが用いてきた戦略が示される。

1. 導入 (145-147)

- フェミニストたちは、定性的な方法論の発展に大いに貢献してきた。
 - ・ 本稿では、定性的な方法のうちフィールド調査とインタビューに焦点を当てる。
 - ・ 本稿の構成は以下のとおりである。まず、従来の定性的な方法論に対してフェミニストたちがいかなる批判を展開してきたのか、その論点を整理する (第 2 節)。つぎに、従来の定性的な方法論の問題点を克服するためにフェミニストたちによって生み出された戦略を説明し、それらを批判的に評価する (第 3 節)。

2. 定性的方法論に対するフェミニストによる批判 (147-160)

- フェミニストたちは、フィールド調査とインタビューにおける伝統的な慣行に関して、以下の 4 つの懸念を示している。
 - ・ 第 1 に、研究上の関係において、人種／民族、ジェンダー、階級の重要性がますます高まっていることに関する懸念、第 2 に、研究対象者の客体化[objectification]に関する懸念、第 3 に、研究対象の選定に影響を及ぼす社会的権力[social power]に関する懸念、第 4 に、従来の分析手法における問題含みな前提条件に関する懸念である。

(1) 人種／民族、ジェンダー、階級の重要性の高まり (147-150)

- 定性的研究は、通常対面でのやりとりを伴い、しばしば長期間にわたって実施される。そのため定性的研究においては、定量的研究よりも、調査者と被調査者の社会的立場 (人種／民族、ジェンダー、階級など) の違いが顕著に意識されることになる。

- 調査対象となるすべてのフィールドは、人種、ジェンダー、階級によって組織化されている。そのためフィールド調査においては、調査者の社会的立場を生かして有利に知見を得ることができる場合もあれば、逆に知見を得るための機会が限定される可能性もある。
 - ・ 例えば、オーストラリアの先住民コミュニティを調査した Diane Bell (1993) は、彼女の子どもを連れてフィールドに入った。コミュニティ内の女性たちは、「母親」である Bell に対して、彼女たちの文化に特有である「母親として知っておくべきこと」を教えようとした。
 - ・ もう 1 つの例として、アラブの遊牧民コミュニティを調査した Lina Abu-Lughod (1995) の研究が挙げられる。Abu-Lughod は出産経験がなかった。そのため、彼女と親しくなった現地の女性たちは、繁殖力を高めるための「秘密の」儀式を行う専門家のところへと彼女を連れて行った。
 - ・ 一方で調査者たちは、ジェンダー化されたフィールドにおいて、ジェンダー化された困難を経験することになる。例えば、Reinharz and Chase (2002) によれば、自分とは異なる性別のアスリートを研究しようとする調査者は、アスリートの生活や交流において重要な場所のひとつであるロッカールームから締め出される。

- インタビューは社会的相互作用の一形態であり、調査を通して得られる知見は、フィールド調査と同様に、調査者の社会的立場によって変容しうる。そのため、どのような社会的立場の調査者が、どのような対象者にインタビューをするのかを注視する必要がある。
 - ・ アメリカの男性看護師を対象とした Christine Williams と Joel Heikes (1993) による調査は、調査者の性別によって、被調査者の回答が異なる可能性を示唆している。
 - ◇ 男性看護師たちは、男性調査者との会話では、男女間の生物学的な性差を強調した一方で、女性調査者との会話では、より間接的に性差について言及し、それが生物学的に自明なものではなく、社会的に構築される可能性について語った。
 - ◇ また女性調査者との会話では、医師に対する批判的な意見が話された一方で、男性調査者との会話では、自身のセクシュアリティ (= 異性愛者であること) に関連した意見が見られた。
 - ◇ これらのパターンは、男性調査者および女性調査者の関心、期待、不安が、それぞれ異なる参照枠によって導かれることを被調査者が予期し、彼らがその予想に従って行動していることを示唆している。

(2) 客体化と他者化 (151-154)

- 欧米のフェミニスト学者は、学問的言説において女性が常に客体化[objectification]されてきたことについて批判を展開してきた。
 - ・ この論点を考察するにあたって、西洋中心的な学問的言説に異議を唱えてきたポストコロニアル理論の知見が有用である¹。
- ポストコロニアル論者たちは、エスノグラフィが被調査者を「他者」として、つまり、調査者である「普通の人」とは異なる「不完全な人間」としてみなしてきたことを批判している (Aggarwal 2000; Minh-ha 1993)。
 - ・ 19 世紀半ばに近代学術として成立した人類学は当初、人類が「彼ら」のような低俗な形態から「我々」のような高度に発達した形態へと進化してきたその過程を理解することを目指していた。
 - ・ もちろん今日の人類学者は、自分たちが研究している集団を表現するのに、「原始的[primitive]」とか「退行的[regressive]」といった言葉を使うことはないだろう。しかしだからといって、被調査者を他者化する問題が消滅したわけではない。
 - ◇ Ravina Aggarwal (2000) は、フィールド調査の根幹をなす「フィールド」という概念そのものが、西洋的な構築物であると指摘している。彼女は、「我々」対「彼ら」、「西洋」対「その他の世界」という二項対立を軸に社会的差異を認識する西洋中心的な視点によって、「フィールド」という概念が生まれたのだと指摘する。
- 一般的なインタビューにおいて、被調査者は調査者のコントロール下に置かれることになる。なぜなら、インタビューでの会話の内容は、調査者が事前に設定するトピックによって構成されるためだ。インタビューにおいて調査者は、被調査者に質問を投げかけ、積極的に話を聞いて継続的に語ることをサポートし、話が脱線した場合には、調査者が設定しているトピックへと話題を戻す (McCracken 1998; Weiss 1994)。
 - ・ Ann Oakley (1981) は、このような主流のインタビューの実践を「擬似的な会話」と呼び、調査者によるコントロールを強調する男性的なものであると論じた。彼女は、調査者と被調査者が同じ「女性」として交流することを通して、女性特有のトピック (女性のヘルスケアへのアクセスや母親としての経験など) に関する豊かな語りが得られると主張する。

¹ ポストコロニアル理論とは、経済や文化、政治に残存する植民地主義の影響を批評するための理論である。代表論者として Edward Wadie Said が挙げられる。ポストコロニアル理論の立場を引き継いだポストコロニアル・フェミニズムは、先進国のフェミニズム理論の批判として始まり、植民地主義と性差別の両方に注意を払うことを目指している。代表論者は Chandra Mohanty (2006)、Devon Mihesuah (2003) などが挙げられる。

- ◇ この Oakley の主張に対しては、調査者と被調査者の社会的立場の違いを認識する重要性や (Ribbens 1989)、調査プロセスおよび分析結果の客観化の必要性 (Acker, Barry, and Esseveld 1983, 1991) を指摘する批判が、フェミニストたちから寄せられてきた。

(3) 研究対象の選定に影響を及ぼす社会的権力 (154-156)

- インタビュー対象者を募集する一般的な方法は、調査候補の団体への手紙の送付、マスメディアでの広告、雪だるま式サンプリングなどが挙げられる²。
 - ・ Lynn Cannon, Elizabeth Higginbotham, and Marianne Leung (1988) は、これらの一般的な募集方法によって得られたサンプルにおいては、人種や階級に偏りが生じることを実証している。
 - ・ Cannon, Higginbotham, and Leung (1988) は、専門職、管理職、事務職の女性の経験を理解するために、白人とアフリカ系アメリカ人のサンプルを同数ずつ集めようとした。彼女たちが調査候補の団体とそのメンバーに手紙を書いたところ、白人の 31% が調査に参加したのに対し、アフリカ系アメリカ人は 13% のみが調査に応じた。
 - ・ なぜこのような人種間の違いが生じるのだろうか？彼女たちはその理由として、アフリカ系アメリカ人女性の自由に使える時間が白人女性よりも少ないことを挙げている³。
- インタビューへの参加は、被調査者の時間とエネルギーを消費させる。特に貧しい人々にとって、その負担は顕著なものとなる。
 - ・ Ann Phoenix (1994) は、貧しい女性を対象としたインタビューにおいて、「無断欠席」がしばしば起こることを指摘している。彼女の調査によると、貧しい人々はインタビューに関心があったとしても、いざインタビューの日になると、光熱費の工面をしたり、新しい住まいを探したり、育児の危機に対処したりと、生きていくための基本的ニーズを満たすために、「無断欠席」を余儀なくされる。

(4) 従来の分析手法における問題含みな前提条件 (156-160)

- 研究者は、調査対象とする現象を理解するために、フィールドに入り、多くの時間を過ごす。その際、多くの研究者たちはグラウンデッド・セオリーを採用し (Charmaz 2004; Glaser and Strauss 1967; Strauss and Corbin 1990) ⁴、分析を通して提示される理論的枠組みは、「データに根ざした」形で構築されると主張する。

² 雪だるま式サンプリングとは、調査対象者に次の調査対象者を紹介してもらう形で、サンプル数を増やす方法である。機縁法とも呼ばれる (野村 2017: 131)。

³ Cannon, Higginbotham, and Leung (1988) は、アフリカ系アメリカ人女性の自由時間が白人女性よりも少ない理由として、彼女たちが自由に休暇を取ることができない職業についていることと、母親であることの可能性が、ともに白人女性よりも高いことを挙げている。

⁴ 社会学者の Barney G. Glaser と Anselm Leonard Strauss によって提唱されたグラウンテッド・セオリー・アプローチは、コーディングを通じて定性的データを分割し、カテゴリーや特性が同じ他のデータと比較することを繰り返して、理論を産出することを目指すアプローチである (野村 2017: 202)。

- ・ グラウンデッド・セオリー・アプローチの根底にある前提は、実証主義の前提に酷似している。
- ・ しかし、多くの定性的研究者たちは実証主義を否定し、データ収集のプロセスを構築的なものと見なす。彼らは、研究者は単にデータのパターンを実証主義的に観察しているのではなく、社会現象を多様な角度から解釈していると主張する (Geertz 1973)。

3. フェミニストによる戦略 (160-191)

- ・ 以下では、定性的方法論の問題点に対処するためにフェミニストが用いてきた戦略を 3 つの観点から示す。

戦略①：調査者と被調査者のつながりを強化する

戦略②：研究者の限定的な視点を補う

戦略③：コラボレーションする

戦略①：調査者と被調査者のつながりを強化する (160-167)

- ・ フェミニスト調査者のなかには、調査者と被調査者の間のつながりを重視する者もいる。以下この戦略について、①-1 互恵的な関係づくり、①-2 感情の活用という 2 つの項目から整理する。

①-1 互恵的な関係づくり

- ・ Oakley (1981) は、調査者と被調査者の間に「姉妹の絆[sisterly bonds]」を形成することを、フェミニスト研究の基準として提起する。彼女は、そのようなつながりが調査者に対する被調査者の信頼や共感を高め、より良い研究を生み出すと主張し、女性の個人的・社会的関心に基づいた親密な相互関係を築くことを基本としたインタビュー戦略を示した。
 - ・ 一方 Shulamit Reinharz and Susan Chase (2002) は、Oakley の戦略を問題視する。なぜなら、被調査者が調査者の信念、価値観、感情について知り、それらに共感することによって、その調査者を喜ばせるために虚偽の回答をする可能性が生じるためである。

①-2 感情の活用

- ・ 定性的な調査における調査者と被調査者の交流は、必然的に感情的な反応を引き起こす (Carroll 2013; Lumsden 2009)。フェミニスト調査者の中には、その感情的な反応を調査や分析の指針として用いる者もいる。

- Susan Krieger は、1970 年代後半に客員教授として 1 年間滞在した中西部の大学都市のレスビアン・コミュニティで 78 回ものインタビューを実施した (Krieger 1983)。彼女は、インタビュー・データの分析に際して、インタビュー対象者に対する期待や不満といった自らの感情的な反応をもデータとして採用することによって、調査者の感情を明示的に使用する戦略を生み出した。
- しかし、調査者の感情を無批判に信頼することは危険である。調査者たちは自らの感情を分析対象とする際、その感情的な反応の生物学的・社会的基盤について再帰的に考察する必要がある。

戦略②：研究者の限定的な視点を補う (167-185)

- フェミニストは、研究者の限定的な視点を補うために、様々な戦略を試みてきた。以下この戦略について、2 つの有効なアプローチ (②-1 代替言説の活用、②-2 制度的エスノグラフィー) を紹介する。

②-1 代替言説の活用

- フェミニスト研究者たちは、これまで研究対象としてみなされることがなかった女性文化人による言説を研究対象として含めることによって、社会に関するより深い洞察を得ることができると考えた。
 - Marjorie DeVault (1991) は、イギリスの女性作家である Virginia Woolf の小説を、Bettina Aptheker (1989) は、ラテンアメリカやアジア系アメリカ人の女性詩人の言葉を分析対象とした。
 - Patricia Hill Collins (2000) は、アフリカ系アメリカ人女性の生活や世界観に関する考察のために、ブルース・ソングを題材とし、Cheryl Gilkes (2001) は、アフリカ系アメリカ人女性によって書かれた宗教曲を、彼女たち自身の苦悩や葛藤を表現したものとして分析している。

②-2 制度的エスノグラフィー

- 制度的エスノグラフィーは、Dorothy Smith とその弟子たちによって導入されたアプローチで、スタンドポイント認識論に立脚する (Campbell 1998; Campbell and Manicom 1995; DeVault and Gross 2007; Smith 2005) ⁵。

⁵ スタンドポイント認識論とは、これまで等閑視されてきた女性に対する抑圧の存在を明らかにするために、女性の「立場[standpoint]」を中心とした新たな視点を取り入れた認識論である (児玉 2013)。Sandra Harding (1986) によると、スタンドポイント理論は、女性の観点[perspective]を、社会生活についてのわれわれの解釈や説明のための道徳的かつ科学的に望ましい基盤としての「スタンドポイント[standpoint]」へと変容させることを目指す (Harding 1986: 26)。

- ・ 制度的エスノグラフィーを行う調査者は、インタビュー、観察、テキストなど、他のエスノグラファーと同じ種類のデータを使用する。しかし、そのデータと研究目標との関係の捉え方は、根本的に異なる。伝統的なエスノグラフィーでは、これらのデータはそれ自身が「分析対象」であるが、制度的エスノグラファーはデータを「社会的関係への『参入』手段」(Campbell 1998: 57)として捉える。
 - ◇ 伝統的なエスノグラファーは、職場や街角、遊び場、家庭といった「場[site]」を研究対象とする。一方で制度的エスノグラファーは「どのように『場』が機能しているか」(Camp-Bell 1998: 60)を見るために現場に入り、人々の日常体験がどのように社会的に組織化されているかを学ぶ。

戦略③：コラボレーションする (185-191)

- ・ 3つ目の戦略は、研究プロジェクトにおいてコラボレーションを構築することである。以下この戦略を、③-1 研究者チームにおけるコラボレーション、③-2 グループインタビューにおけるコラボレーションの2つに着目して説明する。

③-1 研究者チームにおけるコラボレーション (186-187)

- ・ 研究者は多様な方法で互いに協力し合うことができる。
 - ・ 例として、Barbara Laslett and Rhona Rapoport (1975) および Joan Acker, Kate Barry, and Johanna Esseveld (1983, 1991) の共同インタビュー、Janet Finch, and Jennifer Mason (1990) の共同研究プロジェクトなどが挙げられる。
 - ・ 異なる分野の学者と協力することも有益である。歴史学者である Kathryn Anderson と心理学者である Dana C. Jack は、インタビューにおける聞き取り能力を向上させるために、互いのインタビュー原稿を共有した。その結果、2人の対照的な研究方針が、互いの調査をより豊かにする可能性が見られた。歴史学者は、被調査者の語りの社会的背景を分析するよう心理学者にアドバイスし、心理学者は、一連の出来事が被調査者にとって何を意味するのかを問うよう歴史学者に促した。このように、データ収集における研究者間のコラボレーションは、データの質を高めることに寄与する。

③-2 グループインタビューにおけるコラボレーション (188-191)

- ・ グループインタビューは、「調査者が決めたトピックについて、グループの相互作用を通じてデータを収集する研究手法」である (Morgan 1996: 130)。
 - ・ グループインタビューの利点は、グループのメンバーによって互いに質問が促されることや、メンバーがそれぞれの意見に異議や賛成を示す様子を観察できることである (Montell 1999)。

- ・ グループインタビューでは、個人インタビューとは異なる種類のデータが得られる可能性がある (Morgan 1996)。Montell (1999) は、セクシュアリティに関するグループインタビューでの経験を説明しながら、デリケートな話題に関しては調査者と 1 対 1 で話すより、むしろ仲間同士の方が話しやすい場合があることを論じている。

4. 結論 (191-193)

- ・ フェミニスト調査者は、従来の定性的方法論が有する問題を解決するために、さまざまな戦略を提示し、社会正義のための可能性を拓いてきた。
 - ・ 一方で、社会科学の知見が不利な立場に置かれている人々をエンパワーするかどうかは、どのような問いを立て、調査者がその結果を誰にどのように伝えるかによって決定する。健全な学問と社会正義のためには、どのような問いを立て、どのような答えを提供するのかについて考察を深める必要がある。

【参考文献】 (Sprague (2016) に未記載の文献を挙げる。)

児玉由佳, 2013, 「スタンドポイント・アプローチについての批判的検討」児玉由佳編『ジェンダー分析における方法論の検討』日本貿易振興機構アジア経済研究所, 6-15.

野村康, 2017, 『社会科学の考え方』名古屋大学出版会.

Harding, Sandra, 1986, *The Science Question in Feminism*, Cornell University Press.